

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |                 |      |            |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------|------|------------|
| 表 題                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | 献花(2023.07期テーマ) |      |            |
| 著 者                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | 高見 晴彦(取り纏め)     |      |            |
| 作 成 日                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | 2023年7月11日      | 最終更新 | 2024年7月27日 |
| <p>キリスト教会葬儀研究所(CCFI) <a href="http://www.ccfi.jp/">http://www.ccfi.jp/</a></p> <p>2023.07期テーマレポート</p> <p>[全般向け]</p> <p>本レポートは特段の対象を設けていませんが、強いて言えば一部実務者向けの実用的なくだりがあります。</p> <p>また原則として現在の日本国内の事情を述べています。</p> <p>2023年7月11日～ 逐次加筆修正</p> <p>2023年7月20日 卓上献花の実際 追加</p> <p>2023年7月24日 献花の向きに対する大衆理解 他追加</p> <p>2023年7月26日 一部加筆修正</p> <p>2023年7月31日 コラム追加</p> <p>2024年2月14日 教職の献花のタイミング 一部追記</p> <p>2024年7月27日 「卓上献花儀礼の成立」加筆修正(再度修正)</p> |                 |      |            |

## ▽用語

本稿で扱う「献花」とは、死者の葬送あるいは追悼に際して手向けられる生花の類です。他に「捧花(ほうか)<sup>1)</sup>」や後述する「飾花(しょっか)」等の名で呼ばれることがあります。献花という語が広く通用しており、その他の呼称は現時点においては一般的ではありません。

## ▽人類と献花

人類が献花を行った最古の記録ではないかと言われているのは、1950年代後半からイラク北部のシャニダール洞窟で発見された6万5千年～3万5千年前頃のネアンデルタール人の遺跡の例です。発見された遺体群のうち、1960年に発見された4体目の遺体の傍の土壌から、洞窟の中で咲かない花の花粉が見つかり、これが死者に対して花を手向けたものではないかと推測されたのです。(ただし後年の研究により、この種の花に薬効があったために治療に用いられたのではないかという説や、花を巣に貯める習性のある動物が運び入れたのではないかという説もあり、見解は分かれています<sup>2)</sup>)

いずれにせよ、記録に残らないほど古くから人類は死者に対して花を手向けてきたのではないのでしょうか。フィリップ・アリエスをはじめ多くの論者が「葬りを行うのは人類だけ」と言いますが、逆に葬りを行うことが人類と動物を分けるのであれば、仲間の死に際し花を手向けることは火を焚くことや音を鳴らすこと、遺体を埋める(あるいは洞窟等に納める)こと等と並んで、人類の黎明期から自然に行われていたのではないかと思えます。

## ▽献花の様態

今日、実際に行われる献花の様態を大別すると、次のようになるでしょう。

- ① 葬送あるいは追悼に際し、棺(遺体)や遺影、遺骨、祈念碑等、  
死者あるいは死者を表現するものの目前に手向けるもの
- ② 葬送に際し、遺体の納められた棺の中に手向けるもの
- ③ 追悼に際し、その人格存在を想起する場所等に対して手向けるもの

①は例えば現在の日本におけるキリスト教葬儀や無宗教の告別式、またそれらの追悼式

等<sup>3</sup>において広く行われているもので、棺の前に献花用のテーブル(献花台)を設けてその上に花を手向けるものです。棺の蓋の上に行く、あるいは台に下げたり立てかける等、必ずしもテーブルを用いない場合もありますが、本稿では便宜上"卓上献花"と呼称します。

②は概ね埋火葬に送り出すために棺を閉じる直前等に行われるもので、現在の日本では葬儀で選択される宗教に関わりなく広く行われているものです。本稿では便宜上"納棺献花"と呼称します。

③は事故・事件現場や海難が生じた海域等、死者を想起する場所等に対して手向けられるもので、日本に限らず広く行われているものです(追悼式等において儀礼的に行われるものは①に含みます)。本稿では便宜上"追悼献花"と呼称します。

なお葬儀実務者の間では卓上献花と納棺献花の混同を避けるため、例えば卓上献花を「献花」、納棺献花を「お別れの儀」等と言い分けることもありますが、定まったものではありません。

#### ▽献花で用いられる花の種類や様態

卓上献花の場合、多くの参列者が一人ずつ行うのであれば、一輪咲きの花を一人一本手向けるという様態が一般的です。花の長さは取り扱いやすくかつ献花台となるテーブルの奥行きを超えない、30～40cm程度に切り揃えられることが普通です。花の鮮度を保つために、切り口を濡らした脱脂綿等とともにアルミホイル等で包むような仕様も多く見られます。スプレー咲きや房咲き(デンドロビウム等)等の花、また茎が細く柔らかい花(コスモス等)等は、一度に使用される総数が少なければ有り得ないとまでは言えませんが、テーブルの上で大きく広がったり、盆の上で絡まったりするためあまり採用されません。参列者全員ではなく少数の代表者が手向ける場合には、前述の様態の他、リースや花束が採用されることもあります。

不特定多数が訪れる無宗教の告別式や追悼式等では、日本の葬儀の慣習的に白や黄の菊が用いられることが比較的多いですが、近親者で行われる場合等には種類も色も幅広く故人の好きだった花が用いられることもあります。キリスト教の葬儀等では菊はあまり好まれず、カーネーション等が用いられることが多いですが、故人の名前に「菊」が入っているとか、菊を育てるのが趣味だった等の理由で献花に菊を採用するケースもあります。色は白が比較的多く見られました<sup>4</sup>が、他宗教の葬儀等に比べ式場に飾る生花類にも色花を用いることも多いため、特に近年では献花にも色花を用いることもあります(実例として、

筆者の葬儀社では白単色と複数混色のカーネーションを献花の選択肢として提示していますが、複数混色を選択する遺族等が多数です)。他に外形上の要件に馴染みやすい花としてバラが用いられることもあります。習俗的に葬儀で棘のある花を用いることに抵抗感を持つ人もいますので、参列者の傾向によっては多少の注意を要する場合があります。

納棺献花に用いられる花は、多くの場合葬式場に飾られている花ですので、種類も色もそれぞれです。追悼献花に用いられる花もそれぞれですが、リースや花束等が用いられることもあれば、花卉だけを沢山千切って目指す範囲に散らすような方法が見られることもあります。(※これは例えば船上から当該海域に撒くというケース等で、分解されにくいフィルム等を海上に流さないため、といったようなことを理由とされる場合もあります)

#### ▽卓上献花儀礼の成立

今日広く行われているような、告別式等に際して参列者が一人ずつ霊前に進み、テーブル(献花台)に主に主宰者側の用意した花を一輪ずつ手向けるという儀礼的な様態の卓上献花は、日本において社会的需要から独自に発生したと言われており<sup>56)</sup>、海外では参列者が持ち寄った花を手向ける自由な卓上献花や納棺献花までに止まるようです。今日のような儀礼的卓上献花がいつ頃成立したかは明確ではありませんが、大凡昭和30年代後半(1960～1965年頃)と推測されます。

日本においてビニールハウス栽培が実用化したのは昭和30年代に入ってからであり、葬儀に一年を通してキク等が供給されるようになったのもこれ以降です<sup>77)</sup>。また習俗が形成されるまでには一定の時間を要します。映像が確認できるものとして樺美智子さん(かんばみちこ・昭和35年、安保闘争中に亡くなった女学生)の死に際しては、亡くなった翌日に亡くなった場所に献花台が設けられ多くの人が偲んでいます。ただしこの折には参列者がめいめい持ち寄ったと見られるキクやユリ等の花を献げ、またその後行われる国民葬(主宰者発表の名称)等においては祭壇前に献花台のようなものは見られないため、前出の献花も主宰者側が儀礼として設定したものではなかったことが覗えます。

そして時代が下り1970(昭和45)年発行の複数のいわゆるマナー本の中には一般的なキリスト教葬儀儀礼として献花という名称とともにこの様態が記されていますし<sup>78)</sup>、1967(昭和42)年に無宗教で行われた吉田茂元首相の国葬儀(本人の信仰はカトリックであったという)においても卓上献花が採用されていますから、遅くとも高度経済成長期(1955～73)中盤までにはこういった儀礼が普及していたことが分かります。そのため、高度経済成長期に告別式等への参列者が増える(ある年表によると1965(昭和40)年頃に「通夜への一般の

会葬者が出る、また一般会葬者数が増える傾向が始まる」とされている<sup>9)</sup>中で、キリスト教葬儀に付随する告別式において参列者が弔意を表すために焼香や玉串奉奠に代わる儀礼として自然と広がっていったのではないか、という見方が有力と思われます。

なお先行研究者が「昭和の初めの頃には献花も入っている。式文化されていないけれども、そういうものが比較的早い時期から実際に行われてきた<sup>10)</sup>」と述べていますが、例えば大正期に母の日が日本にもたらされ特にキリスト教社会の一部においては早くから認知されており、現在の卓上献花儀礼が様式として成立する以前から献花という言葉自体は成立していたのではないかと考えられ、引き続き調査を要します。

(※またある方から、「日本におけるキリスト教の卓上献花は関西学院教会(日本基督教団)の信徒会員であった葬儀士が始めた、といった記述をいずこかで見た記憶がある」という情報を頂きましたが、出典がわかりませんのでご存じの方がいらっしゃればご教示下さい)

#### ▽日本のキリスト教葬儀における儀礼的卓上献花に対する批判

前述のように儀礼的な卓上献花は日本で成立していますから、キリスト教会が元来持つ慣習ではありません。このため、卓上献花の発生以来、こういった献花をキリスト教葬儀や付随する告別式において行うことに対する批判も根強くあります<sup>11)</sup>。これは特にプロテスタントの中でも保守的な教会に比較的多く見られ、カトリックにおいては近年やや寛容な傾向がありますが、いずれにせよ教職間の話題として取り上げられることが普通で、一般の信徒が特段に気にしたり、教派や教会全体で制限しているというような話は、エホバの証人等いわゆる原理主義的な一部のグループを除けばほとんど聞きません(エホバの証人は葬式自体をしませんので、当然に卓上献花も行いません)。また普及への過渡期を過ぎた教職からは比較的多く聞かれたものの、現在では多くの教職・信徒ともにこのような卓上献花が社会的に定着した後の世代であることから、今日、研究上はともかく葬儀の現場において表立って問題となることは考えづらくなっているというのが実感です。

この批判に至る理由は概ね「日本人は死者を神仏として拝礼するが、キリスト教における拝礼の対象は神のみであるにも関わらず、仏教や神道で拝礼のために行われる焼香や玉串奉奠に代わるものとして献花を行えば、参列者がキリスト教の葬儀においても死者を拝礼の対象と錯覚するおそれがあるから」等といわれます。また例として古代教会の葬儀について「死者の遺体を花で飾ることは、はじめは死者供養と通じるものがあるとして禁じられたようであるが、次第に一般化していった<sup>12)</sup>」といった記述等に見られるように、すでに死者の霊は神の手に委ねられているところ、供物を捧げる等追善供養と捉えかねない

儀礼を行うことがキリスト教の理念にそぐわないから、という見方もされます。

#### ▽批判の影響

このことから、特に問題とされたのは「献花」という語と手向ける際の花の向きです。まず「献花」という語については「献げる」という言葉が献金・献身等、神仏に対するささげ物と理解され、前述のようにあたかも花を手向ける対象が神仏であるかのような誤解を生むのではないか、という懸念が抱かれました。これは「捧花」も同様でしょう(捧花という言葉自体が流通していませんから、直接的にこの批判を聞いたことはありませんが)。また様態は違いますが、「供花」という語も同様の理由から忌避されることがあります。そして献花の茎ではなく花冠が死者の方を向いて手向けられるということが、死者へのささげ物・供え物という色彩を強め、間接的に死者拝礼に繋がるのではないか、ということも懸念されました。そのため、一部では卓上献花を「飾花」と称し、花冠の向きを手前にすると定め、「これはあくまで棺の前を飾っているものであって、ささげ物ではない」と説明する人々もありましたが、実際にはそのグループの中における納得・満足に止まり、世間に通用するまでには至りませんでした。なお現在ではそこからさらに派生し、卓上献花を「献花」、納棺献花を「飾花」と呼び分けている人々もあり、すでに本来の趣旨を失いつつあるケースも見られます。

名称の言い換えが定着しなかった一方で、花を手向ける向きについては比較的初期から手前向きが一般化していたようで、少なくとも1970年のマナー本にはこのように図解されています<sup>13</sup>。神式の玉串奉奠が榊の茎を先に向けることもあり、受け入れられやすかったのかもしれませんが。なおこの当時の解説は「根のほうを霊前に向ける」とあるものの、近年多く見られる「係から受け取った献花を玉串奉奠と似た要領で回す」といったような記述はなく、葬儀ジャーナリストの碑文谷創によるとこれは昭和60年代頃以降にマナー専門家なる者たちが言いだしたものではないか、とのことです。

また「弔意を表するために献花を行いたいという参列者の心情は分かるとしても、キリスト教の礼拝の一部としては受け入れられない」という立場から、葬儀(礼拝)と告別式(社会的なお別れ)を明確に分け、葬儀においては献花を行わず、告別式において行うべきだという意見もあります<sup>14</sup>。この場合、葬儀の後に「告別の時」等の名称で時間を設け、献花のみならず弔辞・弔電披露・遺族挨拶等の礼拝以外のプログラムを纏めて行います。

## ▽献花の向きに対する大衆理解

無宗教の葬儀や追悼式等で行われている卓上献花を観察すると、キリスト教葬儀等で主に行われている花の向きとは逆に、花冠を霊前に向け、茎を手前に向けて手向けている場合も少なくありません。またこれまで述べたようにキリスト教界内で卓上献花の発生初期から花の向きが問題視されていたことから分かるように、特段の意味付けを伴わない限りは、霊前向きに花を手向けることは人の心情としては本来自然なこととして行われることでしょう。弔う者は多くの場合、その死者の人格存在を生前から継続的に捉えているのであって、死によって突然に何か別のものに変わったとは見ていません。ですから、花を手向ける行為は生きているその人物に花を贈る行為と根本的に差違は無いのです。「もしあなたが大切な人に花束をプレゼントするならば、当然相手に茎ではなく花を向けるでしょう」と言うのと分かりやすいでしょうか。

多くの識者が“個性ある死者の弔い”と“相応の年月をかけて没個性化した祖霊に対する信仰”を分けて考えるように<sup>15</sup>、この意味においてはキリスト教会が言う「日本人は死者を神仏として拝礼する」という見方は、葬送の現場においてはやや性急であるとも言えます。そのため教会内において「キリスト教葬儀における卓上献花は花冠を手前に向けて手向けるのが相応しい」と論ずることはともかく、実際のキリスト教葬儀の現場において花冠を霊前に向けて手向ける人がいたとしても、それを「キリスト教として正しくない」「信仰的でない誤ったやり方だ」等と批判することまでもが適当とは言えません。そもそもが献花自体、キリスト教の教理や定式の埒外と前提しているように、花の向きなど教会が定めるべきものではないのです。

## ▽キリスト教の葬儀等における卓上献花の実際

卓上献花は概ね、まず遺族代表者(喪主等)をはじめ、遺族や親類、特段の関係者等から進路を進み、献花台の手前で係から花を受け取り、献花台に手向け、退路に向かいます(いわゆるマナー本等の中には、花の取り扱いや礼の作法等が細かく記されているものも見られますが、これまでに述べたようにそもそもがキリスト教の儀礼ではないため、少なくとも宗教的な決まりはありません)。近親者が終わった後に、参列者が同様に献花を行います。退路には遺族代表者等が挨拶に立つ立礼場が設けられることも多くあります。

## ◇献花の動線

式場内における卓上献花の進路・退路の設定は、式場の構造や参列者の規模によって当

然に変わりますが、基本的な形としては①式場の中央通路から②一人ずつ進み③棺の頭が向いている一方に退く、というものを軸にすると良いでしょう。①は一般的に中央通路が最も広いこと、中央を進むことが儀礼的に美しく見えること、参列者が祭壇に正対するので心情的に満足しやすいこと、等が理由として挙げられます。②は告別の心情的なテンポは参列者一人一人違うものですから、慌てさせないということと、複数人が一度に献花を行うと進路と退路が交差する箇所が生じて衝突することを避けるためです。③は参列者の心理として大凡献花をしながら、あるいは献花の後に故人の顔を見たいものですから、足側に移動するのは不満が生じるからです。式場の構造が左右対称の場合は棺の頭の向きを先に決めても良いですが、片方にしか退きづらい場合は献花の退路を先に決め、そちらに棺の頭を向けるという決定順序が良い場合もあります。また遺影を式場の中心を外して置く場合も、同様に献花の退路側に来るように置くことが望ましいでしょう。

参列者数が多いなど、献花に時間がかかりすぎることで問題になるような場合には、複数人を同時に進めなければならないようなケースもありますが、やや工夫が必要です。例えば二列で中央から進み、左右両側に退くという形では、前述のように棺の足側に移動する人の不満が生じる場合がありますし、立礼場を参列者の再合流地点の外(式場出入口の外等)に設置しなければならないという欠点がありますので、骨葬や記念会等がかつ立礼を行わない設定でもなければ難しいでしょう。それならばむしろ、花を係から受け取る地点で一度二人を止め、先に花を手向けている二人が退いた後に次の二人を同時に進める、という方法で進退路の交差を生じさせないほうが良いかもしれません(ただし、軍隊的な動きに見えて個人的には余程でなければ推奨しません)。もっと手早く、4人や5人が次々と献花を行わなければならない程に時間が限られているならば、いっそ中央から進むことを諦め、棺の足側になる通路から進み、献花台が空くごとに交代で次の人が入るような形にすると、やや進退路で衝突しにくくなります。ただしいずれの場合も、渋滞するのは献花台の前ではなく立礼場であることが多いので、挨拶を省略させない以上は急がせるにも限界があると考えておいたほうが良く、結果的にはこのようにアレンジする必要がある場合があるとしても、第一には十分に余裕を持って出棺等の時間を設定することが肝要です。

#### ◇献花にかかる時間

基本のように一人ずつが進むとして、大凡参列者100人あたり15分程度を見ておくとう良いでしょう。ただし前述のように立礼場で大渋滞するようなケースもありますから、



適宜誘導する必要はあります。卓上献花の後にまた多くの参列者が納棺献花を行うことで長時間化するというケースもよく見られるため、卓上献花のように進みながらそのまま納棺献花を行うことで、二重に行われていた献花の時間を短縮し告別の時間を長めにとろうとするような方法が取られることもあります。また近年特に、参列者の減少や親しい者のみが参列する傾向が強くなったこと等を受け、卓上献花を行わず納棺献花のみを行うケースも多くなっています。

#### ◇教職の献花のタイミング

教職の献花のタイミングは最初(遺族等の前)にする場合と、最後(会葬者の後)に奏楽者等礼拝奉仕者や献花を渡す係等と一緒にする場合に大別されます。近年の実感では遺族を優先させるために最後にするものの方が多いと思いますが、参列者が教会葬儀に慣れていないような場合には、最初にすることで後の遺族参列者に例を示すことができるという利点もあります。またこのほかのタイミングとしては、開式時(教職の入場時)にする、というものもあります。これは実例は多くありませんが、前述の「献花の時は遺族等から」と「後の参列者に例を示す」の両方を兼ね備えた合理的な方法と言えるかもしれません。なお遺族が献花のやり方等に不安を抱いており、また実施の際に葬儀社等のサポートが十分に期待できないような場合には、教職が遺族代表者と共に初めの献花をするという方法も良いかもしれません。

#### ◇その他のケース

この他、個々の教職の考え方として、「葬式は一度だけ(前夜式は葬式ではない)だから、前夜式では献花をしない」「葬式にも参列する予定の人は前夜式では献花をしない」「遺族近親者の献花は葬儀(礼拝)の中で行うが、一般参列者の献花は葬儀後の告別の時に行う」等のケースに遭遇したことがあります。特に近年では稀と言えます。また棺を縦置きにした場合に、棺の両側に献花台を平行に配置して左右から同時に献花をしたケースもありましたが、動線も取りにくく(両側の通路から進み、中央から退く形になります)個人的にはあまり推奨できません。いずれにせよ、葬式等の準備段階で実際の動きを想像しながらよく打ち合わせしておかなければなりません。

---

\*1キリスト教冠婚葬祭入門(p150他), 山内六郎, 聖文舎, 1973 ※「ほうか」読みは推定

\*2Wikipedia『シャニダール洞窟』参照

\*3仏教の葬儀や法要がホテル等で行われる場合に、施設使用規則として焼香が禁止されて

いるために献花を行うといったケースもあります。

\*4例として1970年のいわゆるマナー本にも「花は持参してもよいのですが、白に限ります」という記述がありますし、実感としては2000年代頃までは世間でも献花は白が当たり前と思われていました。

\*5お葬式 臨終から納骨、法要まで(p93), 碑文谷創, 小学館, 2005

\*6死と葬儀(p259), 山本尚忠(日本基督教団信仰職制委員会編), 日本基督教団出版局, 1974

\*7CCFI月次レポート 2024年5-7月『生花装飾』

\*8慶・弔・諸式の心得(p165), 山際よし子, 池田書店, 1970

\*9SOGI 通巻154・155号合併号(p164), 表現文化社, 2016

\*10礼拝と音楽 No.115(p6), 日本基督教団出版局, 2002

\*11例:「最近当然のことのように行われているこの献花は、教会の葬儀としてとくに意味のあるものではない。仏教のお焼香とか、神式の玉串奉てんのかわりに、日本的な習慣から生まれたものである。告別式と一体になっており、教会では絶対にしてはならないというものでもないが、できたらやめた方がよい。」死と葬儀(p259), 山本尚忠(日本基督教団信仰職制委員会編), 日本基督教団出版局, 1974 等

\*12教会生活の手引き6 死と葬儀(p68), 山本尚忠, 日本基督教団出版局, 1979

\*13冠婚葬祭入門(p157), 塩月弥栄子, 光文社, 1970

\*14日本基督教団 式文(試用版)主日礼拝式・結婚式・葬儀諸式(p136), 日本基督教団信仰職制委員会編, 日本基督教団出版局, 2006

\*15民俗小辞典 死と葬送(p294), 新谷尚紀 関沢まゆみ編, 吉川弘文館, 2005 / 死に方を忘れた日本人(p91), 碑文谷創, 大東出版社, 2003 等

コラム：その花は、ソロモンよりも美しい

”しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。”  
(マタイによる福音書 第6章29節)

人はなぜ大切な人に花を贈るのでしょうか。世界の至る所で、また時代も問わず、人々は互いに花を贈り合いました。つまりはこの行為は特定の文化や思想、宗教に因るものではありません。もっと古く、深く、我々人類の根源的な"衝動"から起こることなのでしょう。祝いや慰め、感謝や謝罪、告白等、花を贈るシーンは様々ですが、そのいずれの根底にあるのも、受け取った相手に「喜び、満足して欲しい」という願いでしょう。そのために、自分にとって良いもの、自分が"美しい"と思うものを贈るのではないのでしょうか。

そしてこの"美しい"と思う気持ちは、人類(ヒト)に特有のものでしょうか。獣や鳥や虫たちの眼に、同じように花の色や形が映っていたとしても、ヒトと違い彼らが関心を寄せるのは、専らその花が「食べられるかどうか」なのではないのでしょうか。即ち、花それ自体が美しく存在しているわけではありません。ヒトの心が、花を美しいと感じるようにできているのです。そして同じようにヒトに限られている"死者を葬る"という特性もまた、花を美しいと感じることと同じ源泉から生じているのではないのでしょうか。

葬送も、その第一義的な目的は"死者の満足"です。そのために、ヒトは長い年月を掛けながら、遺体の保全による死者の"尊厳"の保護や、宗教による"魂の救済"等、様々に複雑な形而上の観念を描き、死者を満足させる…死者が満足したと"信じ"得る、葬送の具体的な方法としてきたのです。その中でも死者に花を手向けることは、その最も初期からある至って単純な方法、しかしそれ故にヒトの心の衝動を最も顕わにする、そのような方法なのではないのでしょうか。

いつの日か文化は替わり、宗教は廃れ、葬送も今とは似ても似つかない方法になるかもしれません。それでも、死者に花を手向けるという行為、大切な人に花を贈りたいという気持ちは、世の最後まで残るのではないのでしょうか。山野に花が咲く限り。ヒトがヒトである限り。